

『キッズレーダー』は、教育や学びの情報を盛り込んだ情報誌です。この時期の子どもたちは、誰もが「自分の世界」を豊かに広げて楽しむチカラを持っています。

私たちは、こうしたチカラを〈ファンタジー〉と呼んでいます。

でも、子どもに寄り添うのはけっこう大変……。自発的な活動や、楽しいこと、好きなことを思い切り味わわせたい。けれど……。

この〈ファンタジー〉のチカラは、その先の学びの原動力になると信じましょう。

### CONTENTS

- 1 …… 特集  
**子どものココロとアタマに火がつくとき**  
～1歩前に進むには～
- 6 …… よってたかって広がる学び  
第2回 たまご
- 8 …… 日能研 低学年の学びワールド  
ユーリカ!きっず  
子どもたちに寄りそって  
ひとりひとりの個性を伸ばす  
2人担当制の秘密
- 10 …… 予科教室 (国語/算数)  
マイファーストテストは  
子どもたちの“初めて”を大切にすテスト
- 12 …… 科学者講座  
科学者マインドを育てる  
子ども同士のコミュニケーション
- 14 …… 読書のとびら  
テーマ 歩みの先に
- 16 …… 解かないでも楽しめる!  
入試問題をのぞいてみよう
- 18 …… 親を学ぶ
- 20 …… 親子でチャレンジ!  
『キッズレーダー』からの挑戦状



# 子どものココロとアタマに火がつくとき

～1歩前に進むには～

低学年の学びは、焦らず、ゆっくり、とは言うけれど……、

とヤキモキする保護者の方も多いのでは？

いつもと同じように見えても、子どものココロとアタマの中には、いろいろなことが起こっています。

今回は、東京女子大学学長の森本あんりさんに、

子どもが1歩前に進むタイミングについてお話をうかがいました。

◆ 今回のナビゲーター ◆

森本あんりさん  
東京女子大学 学長



1956年、神奈川県生まれ。1979年国際基督教大学卒業。プリンストン神学大学を修了(Ph.D.)。専門は神学・宗教学・アメリカ研究。1991年国際基督教大学大学教員、1997年準教授、2001年教授。2012年より2020年まで学務副学長、2022年名誉教授。2002年プリンストン神学大学、2010年バークレー連合神学大学院でそれぞれ客員教授を務める。日本私立大学連盟常務理事、アジア・キリスト教高等教育合同財団理事を歴任。著書に『反知性主義』『不寛容論』(新潮選書)『異端の時代』(岩波新書)『教養を深める』(PHP新書、新刊)など。2022年4月より現職。



『魂の教育 よい本は時を超えて人を動かす』  
森本あんり著/岩波書店/3,190円(税込)

よい読書体験は、よい人間形成につながる、という信条を持つ著者が、子ども時代に手にした本から、学生時代、さらに神学者として学ぶ日々、読んだ本などを幅広く紹介。また本の紹介にとどまらず、著者の記憶、体験、信条、生き方などを記した本になっている。

## 子どもの前に薪を積み上げていませんか？

### 習い事、興味を持ちそうなお子さんを 親は子どもの前に積み上げがちです

ふだんは、大学教育に心血を注いでいらつしやる森本先生ですが、最近の低学年の学びについて感じていることはありますか？

「私は娘が2人いて、さらに小学校2年、1年、幼稚園の3人の孫がいます。その経験から申し上げると、最近の低学年の保護者は、教育に関心の高い方が多い印象です。しかし教育というのは、親が攻めれば、子どもは退くというもので、一筋縄ではいきません。

低学年の保護者は、子どもの前に火のついていない薪を積み上げがちだと感じています。つまり習い事や、子どもが興味を持ちそうなことを、次から次へと子どもに与える傾向があるような気がします」

子どもに何が合うのかは未知数なので、スイミング、ダンス、サッカー、英会話などの習い事を保護者主導で行う傾向はあるかもしれません。それは子どもの可能性を広げる意味合いがあるのではないでしょうか？

「そうですね。ただそれが子どもにとって、プレッシャーになることもあるでしょう。大切なの

は、子どもの興味、関心、好奇心に火がつくことです。火がついていないにもかかわらず、薪をどんどん積み上げて、それは徒労に終わるだけだと思います」

### 親は子どもに火がついた瞬間を 見逃さないように

「火がつくかどうかは、あくまで子ども次第です。親はそれを忘れがちなんです。むしろ子どもに火がついた瞬間を見逃さないことが大切だと感じます。自然に点火したものは、自ら大きく燃えていきます。そこで親の出番です。子どもが興味を持ったことを全力で後押しすればいい。薪をくべるタイミングはここなんです。

そして注意したいのが、親は自分の期待と違うもの、好みでないもの、関心のないものに子どもが興味を持った時に、否定してしまうケースがあります」

親は英会話に興味を持って欲しかったのに、子どもはサッカーに夢中、というようなケースですね。

「そこで子どもの興味を肯定してあげて欲しいですね。

私は大学教育に関わっていますが、学びというのは、大学生でも小学校低学年でも、その根本は変わらないと思います。教育は人を育てる場です。子どもが成長するためには、心と身体にスペースが必要です。それには器を大きくすることが不可欠。小さい器に、いろんなものを放りこんでも、ただ溢れていくだけです。なんにせよ、子どもが興味を持ったことは、器を広げるいいきっかけになると思います」



## なぜいきなり『ファーブル昆虫記』の第5巻だったのか？

### 何が口火になるのかは 子どもにしかわからない

「私の場合ですが、口火になったのは本ですね。印象に残っているのは、『ファーブル昆虫記』です。翻訳がたくさん出ており、再編集などされて今でも読み継がれていますので、みなさんご存じでしょう。世代的に私が読んだのは、おそらく古川晴男訳の偕成社版で、全6巻にまとまったシリーズだったと思います。

子どもの頃、父がその『ファーブル昆虫記』の5巻を私に買ってくれたんです。なぜいきなり5巻？ っと思いませんか？ たまたま書店で5巻が父の目に留まったのだと思っ

ますが、このいい加減さ(笑)。この偶然性！ ただこの5巻とい

うのが、私にとって口火になったことは間違いなく、思っています。

もし1巻だったなら、まだ先があるのか……、と思いつつパラパラとめくっただけで、読む気がしなかったかもしれない。また全6巻をすべて渡されたら、本の量に圧倒されてしまって、どこから読んではいいのかわからなかったかもしれない。そこで5巻なんです(笑)。

最近の低学年の保護者だったら、まず1巻を子どもに渡すと思うんです。順序よく、系統立てて、というのが基本ではないでしょうか？ でも子どもの読書はつまみ食いでもいい。むしろはじめはつまみ食いがいい、と自分の経験から感じています」

### 昆虫の生態よりも 彼らの生き方に興味を持った

そこで、『ファーブル昆虫記』の5巻を読んだ若い少年は、一体、何に興味を持ったのでしょうか？

「昆虫の生態に興味を持つ子どもが多いと思うのですが、私の場合は、昆虫の人生について考えたんです。昆虫だから、虫生かもしれませんが。そこで自分が経験できない世界を想像することに夢中になりました。

それで5巻を読み終わった後、他の巻も買って、6巻すべてを読みました。まさに、このタイミングで父に薪をくべてもらったと言っ

もいいでしょう。火がついてから、子どもが欲しいものをどんどん与えることが、興味関心を広げるポイントだと思います。

1巻のタイトルは、「たまごころがしの生活」なのですが、私は、たまごころがしが作業中に一向に糞を転がさない、ということに興味を持ちました。人間が丸いものを作ろうと思ったら、自然にコロコロ転がすと思いませんか？ でもたまごころがしは、後ろ足を上手につかかって、その場で左官仕事のように、ペタペタと作業して動かさずに玉を作ってしまうんです。そして完成して初めて、玉を転がして、住処に行き行って食べるんです。たまごころがしは、玉を作っている間、何を考えていたのかな？ おいしそうだな？ 後でゆつくり食べるぞ、と思っていたのかな？ など、私はそんな昆虫の気持ち、ずっと考えていた子どもでした」

### なんで？ どうして？ は 子どもにとって大切なこと

「さらに2巻は『かりゅうどばちの観察』で、獲物を狩るジガバチやツチバチを取り扱っている巻です。そこでファーブルは、博物学者で、医師でもあったレオン・デュフルが書いた、タマムシを狩るツチスガリの仲間についての論文を読むんです。ツチスガリは、獲物を土中に埋め、卵を産みつけて幼虫の餌にするハチです。その論文では、獲物を保存するのに、腐らないように防腐剤のようなものを注射している、という記述になっ





## キッズリーダー的 1歩前へ

### 1 子どもに火がついた時を見逃さない

子どもが興味を持ったことや子どもの様子をよく見て、いつもと違うことなどを日々の生活でキャッチすることが大切。

1

### 2 子どもに火がついたら、それが薪をくべるタイミング

子どもが興味を持った事柄の関連イベント、ワークショップなどに一緒に足を運んでみる。一緒に楽しむことで興味が広がるきっかけになることも。

2

### 3 子どもに火がつくきっかけを作る

図書館、博物館、植物園、公園などに行ったり、料理や登山などあれこれやってみる。子どもが興味を持たない場合は、無理じいしないのも大切。

3

### 4 器を広げることが大切

器自体が小さいと、いろいろな体験をしても受け止めきれない。読書はその器を広げることができるのでおすすめ。

4

### 5 大人から見て無駄に見える、役に立たないことに子どもが興味を持って否定しない

親の趣味に合わないこと、無駄に見えること、役に立たないことも、子どもの器を広げる経験になる。

5

### 6 親が勝手に失敗と決めつけない

大人から見たら失敗に見えても、子どもはそう思っていないことも多い。いろんな経験の積み重ねが、1歩前に入る原動力になる。

6

### 7 親は100%子どもの味方

それでいい！ 大丈夫！ と子どもを100%肯定するのが親の役割。そこで子どもは安心してのびのびと学ぶことができる。

7

ていたそうです。

でもファールは、そんなに都合のいい毒をハチが持っているのだろうか？ という疑問を持ちます。そこで自分なりの観察や実験を通して、ツチスガリの獲物は、死んでいるのではなく、麻酔のようなものを打たれた仮死状態だ、と突き止めます。後年、ファールは、この麻酔効果に焦点を当て、コブツチスガリの研究を発表して大きな賞を取っています。

ここで大切なのは、なんで？ どうして？ ですよね。論文に書いてあることを鵜呑みにしない、自分の中から生まれる問いを突き詰めていく、そんなファールに、私はぐいぐい引き込まれました。

本は映像と比べて情報が少ないから、想像力のスペースを作ってくれます。自分自身をふり返っても、低学年の読書体験は大切にして欲しいと思っています」

### 大人は役に立たないものを切り捨てる傾向がある

「大人になって思うのは、本を読む時間が圧倒的に少なくなってしまうことです。

大学教員も授業や事務などで忙しいので、自分の専門分野に関する本を読むだけでせいじつばいです。これは役に立たないもの、自分に関係のないものを切り捨てている状態なんですよね。でもそれって本にもつたない。せめて子どもたちには、いろいろな本を読んで欲しいと思っています」

森本先生は、ご自分の読書遍歴をテーマにした連載をまとめた、『魂の教育 よい本は時を超えて人を動かす』を昨年11月に出版していますね。

「執筆自体が、非常に貴重な体験だったと思います。『ファール昆虫記』は、最初の1冊として出てきます。子どもの頃に読んだ、『ファール昆虫記』を、60代の自分が追体験したといつてもいい。少年の頃の自分の感情、思考などは、年をとっても鮮明に記憶しているものだな、と思えました。やはり読書体験は、その人にとっての一生の財産になると感じます」

## 実は、子どもは失敗していない

### 子どもに対して、

### 失敗という判断をするのは大人

「私は犬を飼っているのですが、たまに家の廊下でおしっこをするんですよ（笑）。でも犬はそれを失敗とは思っていませんよね？ 生理現象ですし、失敗と思ってるのは、人間の判断です。

子どもにも同じことがいえるのではないのでしょうか？ いろいろな行動や言動について、子どもは失敗とは思っていない。失敗認定するのは、保護者ではないですか？ 失敗を恐れていたらチャレンジする心は失われ

ます。それこそ1歩

前に入る勇気もわいてこない。保護者は、失敗認定をするのではなく、見守って欲しいですね。それは子どもにとって器を広げる経験にもなります。

また子どもが失敗を気にするようになったら、自我が芽生えて大人になったんだな、成長したね、と思つたらいい。

そしてどんな時にも親は、100%子どもの味方であつて欲しい。それでいいんだよ、と肯定するだけで、子どもは安心して次の1歩に進んでいくのだと思います」

